

AI 時代に向けた中等社会系教科の学習 —AI を使いこなし、人間の強みを発揮することをめざして—

土肥大次郎（長崎大学大学院）

1. はじめに

AIの進歩はめざましく、多くの情報をつないで自ら思考することを既に始めている。ただし、AIは当然ながら人間の脅威ではなく、人間の快適な生活やより良い社会を実現させるものである。平和で民主的な国家及び社会の形成に向けては、AIを使いこなし、人間の強みを発揮しながら、人々が公民として社会問題について深く考え、社会で活動することが求められよう。

ここでは中等社会系教科の学習に焦点を当て、AI時代に向けて求められる学習として三つを挙げる。一つ目は、AIを使いこなすための政策問題学習である。二つ目は、AI時代に人間が強みを発揮するための論争問題学習である。三つ目は、先の二つの社会問題学習の基礎となるもので、AI時代においても自ら積極的に、そして知的に選択・判断しようとする態度を養い、さらに社会的な見方・考え方を鍛える学習である。

発表ではこれら三つの学習について、知的な学習に重点を置き論じる。これに対し、AIは知的な面において人間を大きくサポートするもので、今後は社会問題についての実践的な学習を重視すべきという主張もあろう。この点は最後に検討したい。

2. AI を使いこなすための政策問題学習

政策問題とは、「構造既定としての社会問題」であり、「社会で解決すべき問題と認識された問題」である。こうした政策問題の学習は、客観的な構造の中で生じている問題について、事実としての構造・因果の説明をめざし、さらに事実に妥当な（合理的な）解決策・改善策の提案まで行う授業も多い。価値に関しては、社会の欠損状態に「問題あり」、「解決すべき」と授業中に共感する場面はあっても、それは当然の価値とされ選択的に判断するものではない。

こうした政策問題の解決策等は事実に思考・判断により導出され、今後「最適解」を求めてAIの活用が期待される。一方で人間はAIの示す解決策等に対し、「本当なのか」、「他には考えられないか」を慎重に判断することが求められよう。こうした判断力育成に向け、社会系教科の学習では政策問題を扱い、因果や解決策等について思考・判断する経験が必要となる。そして、AIの実際の判断能力は分からないが、「他には考えられないか」は人間が特に吟味すべき点だと考えられ、多面的・多角的な考察を重視した政策問題学習が重要だと考える。

そこで、発表では政策問題について、多様な環境的連関と多様な空間的連関にもとづき因果や解決策等について思考・判断する授業案を提示する。

3. 人間の強みを発揮するための論争問題学習

論争問題は、「価値観の異なる個人・集団による選択・判断の相違や衝突によって形成される」社会問題である。こうした論争問題の学習では、実践的な学習として、意思決定や議論などが多く行われる。ただし、知的な面を重視すれば、まずは公共圏での複数の主張を確認し、各主張の目的やその正当性・価値を冷静に理解する必要がある。各主張の理解では、トゥールミン・モデルで考えれば、「データ」（情報）および「データ—理由づけ—主張」のつながり（思考）に客観的な誤りや無理がないよう、事実も大切である。しかし、論争問題で衝突しているのは「理由づけ」に含まれる目的と、それを正当化する「裏づけ」にある価値で、市民による公共圏での正当性を想定した価値的な思考・判断が特に重要となる。

このように論争問題は価値が大きく関わり、AI が果たす役割は事実的な部分に限定されるだろう。主張の目的の正当性・価値を判断するのは人間であり、人間が強みを発揮できる場所である。こうした論争問題学習は AI 時代に特に重要で、市民が選択・判断すべき公共圏の問題を扱うことを考えても、社会系教科の中核になるべきと考える。

このような論争問題学習を実践するうえでの課題を二つを挙げる。一つは、複数の主張をそれぞれ冷静に理解し、さらに意思決定、議論などを行えば、授業構成が複雑になり多くの時間を要することである。もう一つは、カリキュラムや単元計画にどう位置付けるかである。

発表では、中学校で実践した授業や新指導要領にもとづく単元計画を示しながら、これらの課題を論じる。そして、AI 時代に人間の強みを発揮していけるよう、様々なタイプ、テーマの論争問題学習を計画的に数多く行うべきと主張する。

4. 社会の諸事象の学習における選択・判断の場面の設定

学校現場での中等社会系教科の学習は、政策問題への提案や論争問題での主張などに関わる社会問題学習だけではない。指導要領にもとづけば、社会の数多くの具体的事実や概念等についての記述や説明、理解が求められる。こうした学習は、社会問題を広い視野から捉えるための基礎に位置付けられよう。ここでは、こうした社会問題学習以外の諸事象についての学習でも、生徒が選択・判断する場面を設定すべきとする。そして、その選択・判断が、どのような見方・考え方に拠るものかも捉えられるようにする。

AI 時代は日常生活をはじめ様々な場面で、AI に選択・判断を委ねることが増えるだろう。しかし、社会形成では合理的で正当性のある選択・判断に人々が積極的に関わることを求められる。社会の諸事象についての普段の学習から、知的な考察にもとづき自ら選択・判断していくことが、社会に関して知的に選択・判断しようとする探究態度を養うことになる。さらに、現実の社会問題に対して積極的に選択・判断しようとする参加姿勢にも結び付くと考える。また、AI に選択・判断を多く委ねれば、見方・考え方を働かせる機会は減り、社会的な見方・考え方をいっそう意識的に鍛える必要があるとも考える。

具体的には片上（2011）の「社会研究科」を参考に、「紫式部と平安時代」の授業でみられるような「複眼的な視点」や「社会的な事象を捉える「枠組み（見方・考え方）」」などを大切にしたい学習で、実践しやすいものを幾つか具体例を挙げて論じたい。

5. 中等社会系教科における実践的な学習

社会形成では社会問題についての知的な思考だけでなく、実践的な活動が求められる。これは AI 時代でも変わらず、中等段階では実践的な学習も重要である。

ただし、提案や行動、意思決定や議論などの実践的活動が必要となる、他者との関係形成や協働などに関わる社会的スキル、参加姿勢などの態度、これらのリアルな育成は真に切実な問題に取り組むことで可能となる。中等教育において、生徒にとって真に切実な問題を扱う実践的活動は、特別活動が主に担う。指導要領によれば、特別活動は「社会の形成者としての見方・考え方を働かせ」、学級・HRや学校という「小さな社会」の「発展に資する」ことを重視する。この点を踏まえ、中等社会系教科では特別活動との関連を図り、実践的活動で必要となる知的な能力の育成に重点を置くべきである。一方で、教科の知的な学習と特別活動との間をつなぐ、現実の大きな社会・社会問題を扱う実践的な学習も取り入れ、教室内でできる提案、意思決定や議論などを行い、知的な能力、社会的スキル、態度の総合的な育成にも関わるべきだろう。

参考文献

片上宗二『「社会研究科」による社会科授業の革新—社会科の現在、過去、未来—』風間書房、2011年。